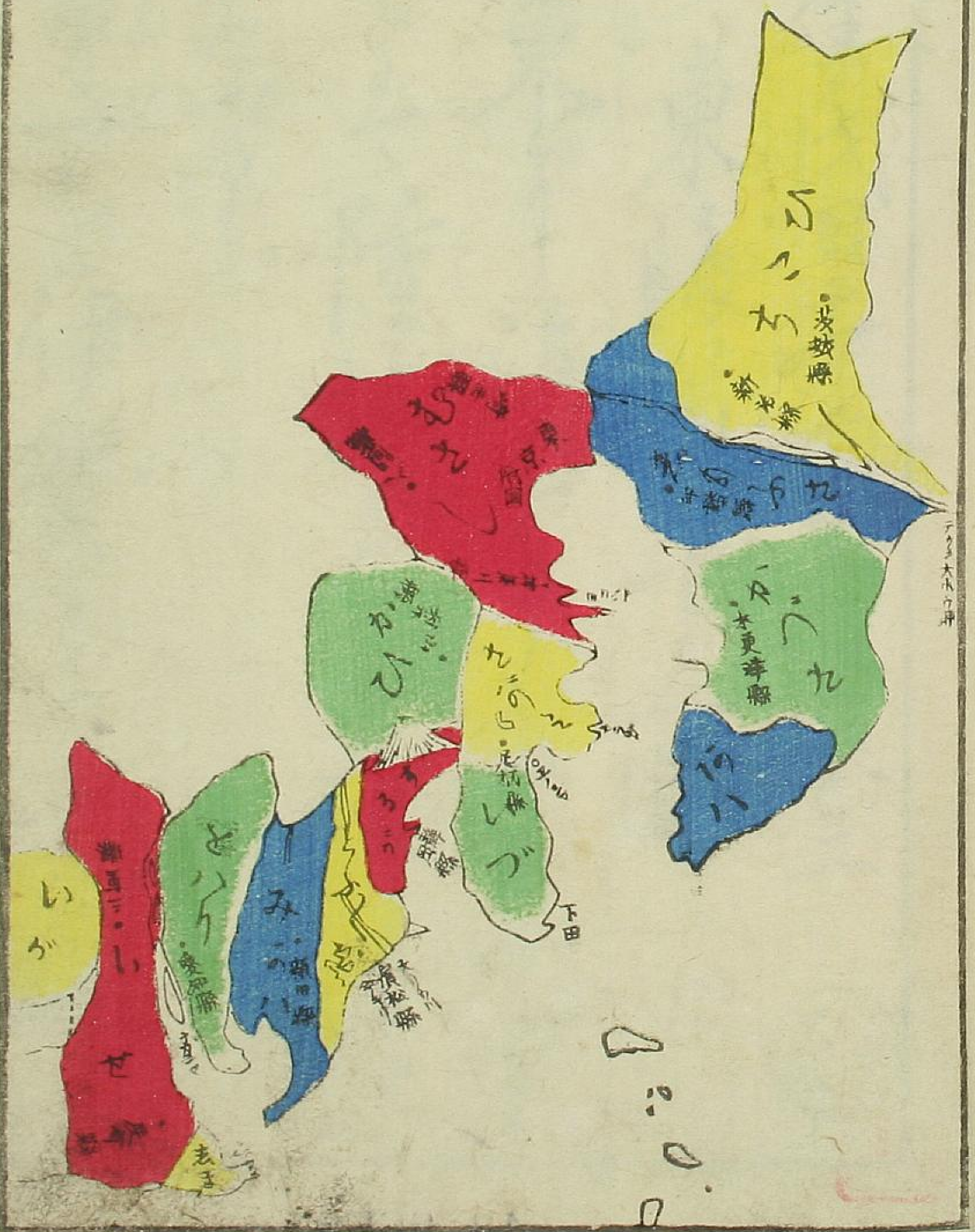
瓜生氏
日本國盡
東海道
二

柳田文庫
文庫11
A 1846
2

東海道之図



文庫11
A1846
2

東海道之圖

48 9658

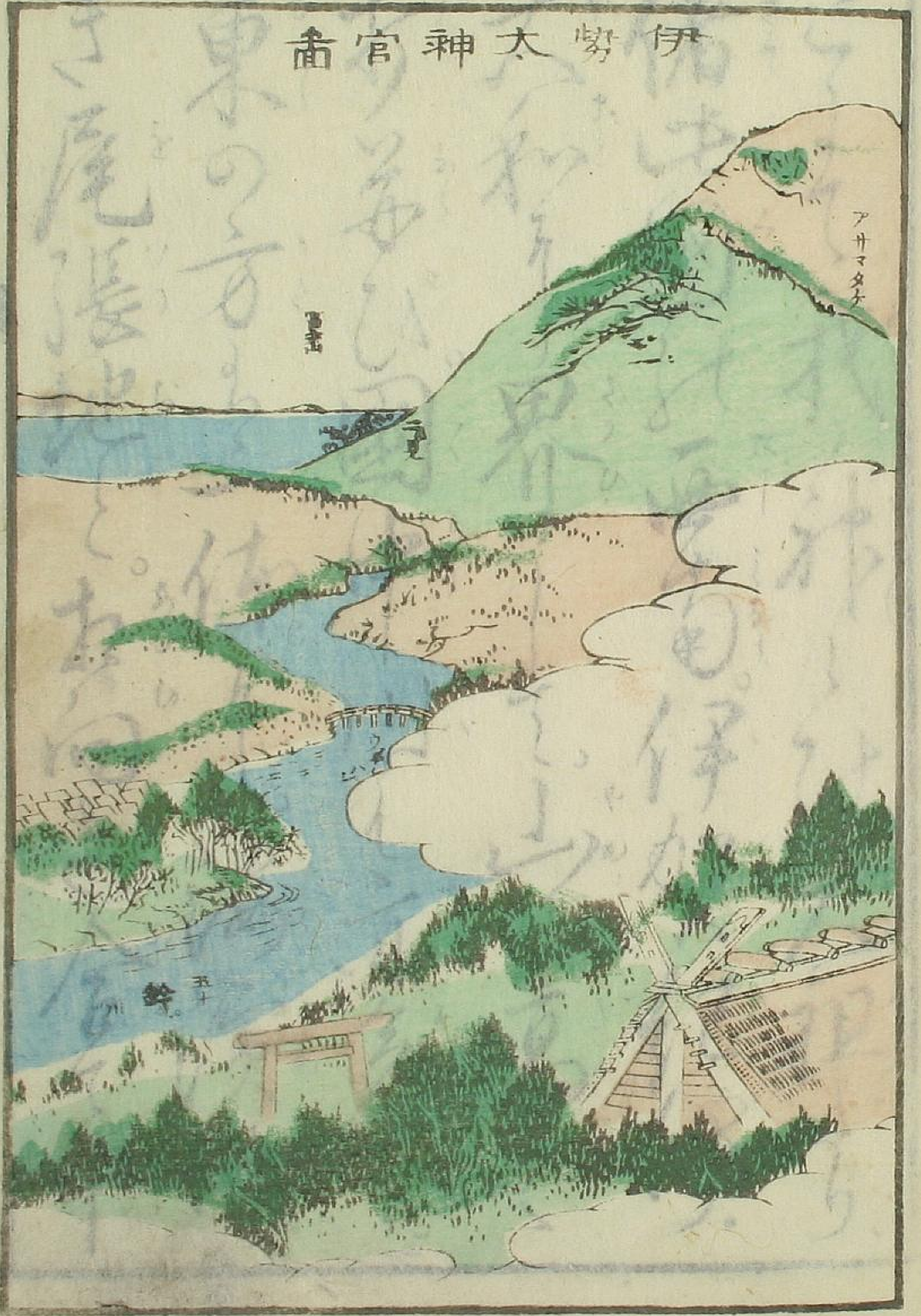
瓜生氏日本國盡巻二

東海道十五國

南東より海をうけ。西と北とハ陸地にて。是八道の魁なり。其第一を伊賀といふ。五畿の

東の山國ふく。海あし國は
括れ四つ畿西の和泉にお
對し二つの耳のぬくなり。
四方山ふく川多く人口纔八
万人。气候は程好くあたゝか
なれども。民輕薄の風として。

陸れ伊勢よりはじめ
して地よきところあり。
第二の伊勢まて垂仁の帝八い
来
天照太神の宮所。五十鈴は
川は水上より。立をまもく



伊勢太神宮畵

長閑なる。朝日の昇る君が
代の光り輝く源にて内外の
御神まして。外宮にて豊受
太神。天地開闢の始祖なる
國常立尊なり。内外の輝
難自から神霊いつしいから

こゝにて我か神は太祖から
備せ國は西に伊賀紀伊
大和に界して山高く
北并び國中川に亦多し
東の方は一体に海濱にし
き尾張地と相向き合て中

斎宮輳太宮跡

みな海名付て伊勢の海といふ。其海少し入こみたる。桑名と
いへる一市街なり。東海道の
一宿驛。尾張の熱田へ通ふ
なる。海上七里計渡しあ
里。海を沿て路三里南北

方の四日市。三重の縣の廳あ
里て。伊賀一圓と當國の郡
八ツを支配せり。其文南宮植。
高き山田の市中にある度
會縣の廳を置きて。當國
五郡志摩一圓。紀伊の一郡

をと管轄し。彼は両国にして
の内たる里一國中は人口凡そ。
四十七万六千余。氣候は暖
寒相ほどよくして。山海平均
地味厚く。温和は土地の外
風なり。伊勢の名にし称国土

ど。風俗一体質朴にして。くらしよし。ふ
金の色をまとう人。世言は倖ち
ありらしく。内心絹のごとく
また心きたなきとをあ
里さぬれど。学べば自ら昇
化し。進みし知も多く。敦き

風もよむべし萩も名所
なる朝熊山万金丹の名所なる
里。伊賀。伊勢。近江の界なり
ある。鈴鹿の山や八十瀬川。
関も戸ざゝぬ浪風も立ぬ
二見の浦千鳥。[illegible]

しるき紀伊や。其名も阿漕が浦
又名物の果にて蛤。鰒。和布。
海蘿。海老。白魚に銀子。
津庄木綿や伊勢暦。
第三志摩は勢州より
巳より張出し岬まで二河

の伊良子と相對し。伊勢
乃入江の門をなせり。其つゝし
へきを今もまへし。廣く海中
指出しをいつの頃や也畢
浪よく。岸おく崩れ土落
て。大方うち海となり。今

尚おのる象しし。元は本地
の地はさらきゝます今おは地
まうせ後り。伊勢の國より
さきとも。志摩の國
地り入まへしとふや。此國
至て小國ながら海藻多く

土地あしく人口三万七千余
気候風俗おしなべて伊
豆とこのならしとこなたに
し港ハ名高き鳥羽浦
又東海船の碇泊場にて是
出れバ七十五里伊豆の下

田ハ港にて。山くゞ見えぬ島
が洋を渡りて海路ハ
風待すべき港なしよりて
船客十分の退屈の風をなん
すまぐれバみな此浦より
帆をおろし旅の労をさとや

さてもしく桟。其産物をとさ
ゝ海苔鯔ふくたみせ蛤貝。
西の尾張を伊勢の海ばかり
東は三河の岸なりして北は
美濃ひ南は海濱おはし
き南北長く東西を狭く

短く瓢箪を横たへ臥せた
るすがた象るに瓢箪のすぢ底は北方。
北より木曽川流れ出で西
南へ海に入る。木曽川美濃
と尾張との界にあるを
名を尾越川と申すなり。

並し繁昌の一都會。名古屋といへる市街は。三都につぎて賑ひにて軒を並べし商人諸富豪の家のいと多く田畑豊饒の縣廳は當國七郡を管轄

し。知多の一郡は海へ突き出し岬にて隣國三河の額田なる額田縣廳の支配なり八郡總ての人口およそ六十万といへり五千七百あまりなり氣候

暖氣あり土地肥えて人は
寺家も武家の。へだてなき
風俗よく。昔より秀し人ぞ
いと多し。其産物は錦
藩主鳴海絞りに瀬戸
磁器

三河は矢矧川大平川
と豊川の三つの大河ある
なり。三河の國と稱へ
東面。南は海濱北は山々の
境界も廣くして平原
廣野いと物多く。南の海へ

さし出たる。渥美といへる一郡
は尾張の智多に相並び。
二ツの角のごとくにして。
其端志摩と相對し。伊
勢の海は八口まで。伊良古
といへる岬あるを。備中國は

一圓は土質一躰あしくして。
五穀の熟しも薄く稔らず。寒
暑温和なり。風俗は實多
くして恥をしる。人口四十二
万余。額田の郡岡崎あり。額
田は郡の廳ありて。参河

中と尾張なり。知多一郡
を管轄す。名倉砥石。吉
良雲母。芋川温飩。足代紙。
是ハ土産の名物なり。
第六番ハ遠江。北ハ高峰
おひ重り。秋葉。白山嶽。ま鹿。

春日。大日。白光山中を流るゝ
天龍の川ハ隣國信濃なる。
諏訪の湖より出て。全國中
を蔓延り。東の方ハ大井川
海道一の大河なり。駿河の
國との界なり。南の方ハ

陸海天。塩見坂より眺むれば
沖は即ち遠州洋。太平
海は目の内にして。天水連なる
一点の眼を遮る物もなし。
風土は参河とかはらねど
北山中はやや寒し。土質

厚くよく熟せり。一國中かゝ
人口は三十四万二千余人。氣
つよく智もあまりく。ちゝと
性急のとけいなあまり。土一王い
濱松とく明慶八年地震
まく。大山くづれて八海と。

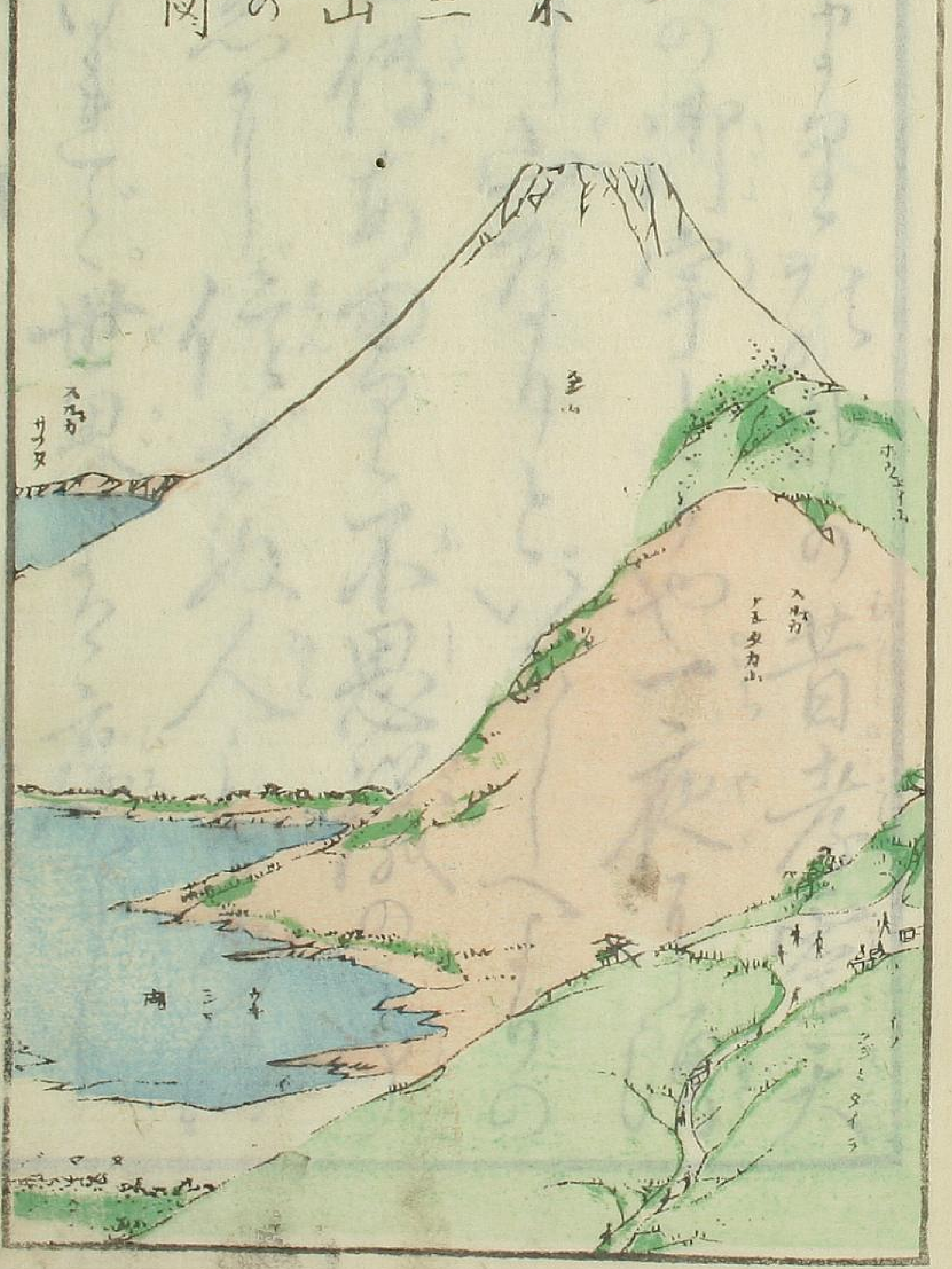
なゝまで築たる今切の荒
井を渡して天龍の川は間に
市街はつゞく遠駿は
支配なり。当國土産の概略
紫根・茜根・葛の布・蜜柑
相良や掛塚。其名なれ

ことて厳餅
七り駿河も南海。伊豆
一國しるお對し。中まて入海
三保の浦遠あたりを眺
ますて古と左小遠州ト。
豆州の山て立ち並び廣

き浦頭の其中り清見ヶ
関や田子の浦あるひハ羽衣
いつまでとし。あかぬ絶景を
三保の松。旅寝の憂も忘る
らん。小そ一面山つゞき三國一
の富士の山其高きこと海

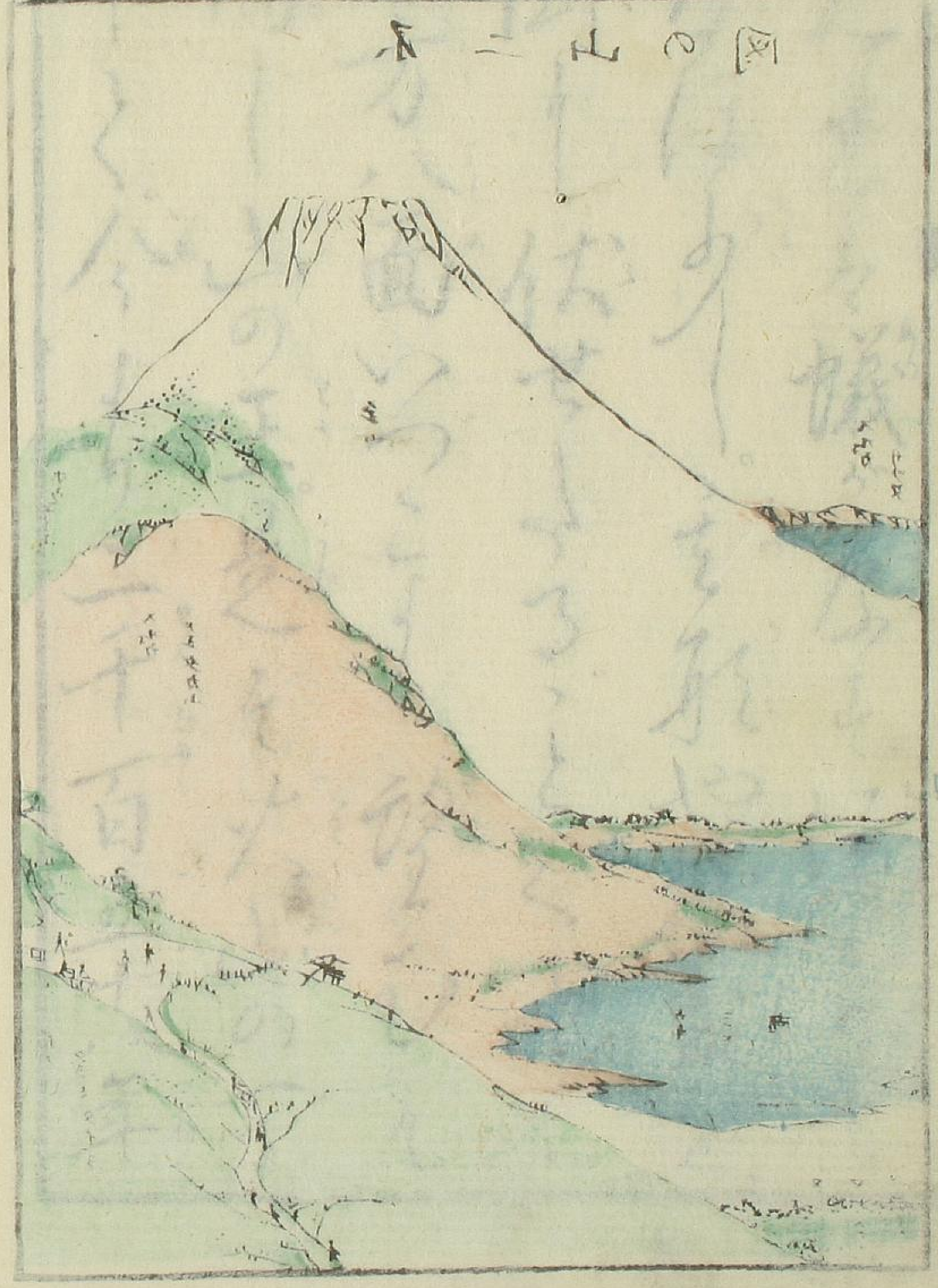
面より直立一千四百丈にして絶
頂ハ白妙なり。四时白雪を
載く里。麓ハ駿河の甲斐。
相模三ヶ國に跨りて。
其傍に高山あれど。たとへは
しあら孫どもの山の上より

不二山の図



ろくまでも蟻がなきて垤よりも
なほひくし。富士也擂盆を。
倒にし伏せるごとく。
四方八面いづこより。望むも
同じ。山の王是ぞ火山の一つ
して今より二千百五十八年

いかなれば北の昔孝霊天皇の御宇とかや一夜に湧出し山なりとぞ。いにしへよりの言傳へ。あまた不思議のことゆゑあり。信ぜぬ人もあるべけれど。世界ある廣し



こゝに載ず。是れ。地中にして大
気多なきて作業。古来注さ
あるをとふく。近くして小の
亜墨利加よりジヨルロの峯
の出来しより。信濃國に
川こそ。一りゝ富士川矢の如く

二あり。安倍川の傍なり。静岡
縣の廳ありて。駿河一國を
管轄し。町々殊に繁昌
す。此一國は人口凡そ二十五万
三千余。地形は右にもいふ
ごとく。山を背負ひ海を抱

き河を帯びたる國なま一ず。寒暑中正温暖にて地味
一際厚かれど。人ゝ気まゝに
遠かとところのかりにて揆
くして實を欠きし前端し
なき風とかや。其産物乃

品あり。駿河の半紙に竹細
工。松魚冨士苔。沖津鯛。
大八甲斐は山中の偏地なれ
ども一都會。海なし山に
挟まれ五つの湖を冨士山あり
覆ひ。林藤み流る冨士川

枝流支流國内を縦横
通して西の方地蔵鳳凰
駒嶽白嶺の山脈。七面山身
延山より引連なり。北に向へば
金峰山。板垣山より天目山。
高山多き其中に甲府と

いへる都會あり。繁昌にて遠き
たる山梨縣の支配にて甲
斐一國を一圓とし人口凡二十
九万七千余。氣候不正なり
陽氣すくなく。たゞ草木のみ
生茂り人氣も餘り強過て。

不道理なること多しとて。
終に武田氏晴信に亡され
しことはありと聞く。其
産物ハ蠟、漆、紙や郡内紬、
葡萄。小梅、姫胡桃
東海道の第九番伊豆まで

駿河と相模との間に出たる
岬なり。三方は多く海岸
にて北ハ箱根の険を負
ひ相模の國と此國界中り
天城の山とあり。属島ハ多く
七島のかゝり青ヶ島八丈嶋山

山と海との利も多く。所に
温泉湧き出る中に修善寺
し名湯も。相模につゞきし
海岸に。熱海の湯の名も
高く悪疾難病ある人も
遠きをも厭はずしてみなきたる。

集ふ浴をなすとぞや。
南にさし出し其端に下田
の港繁昌し船舶碇立
て置きつる。海上遠く輝ける
渡海往来の船の宿れ月。
光をぞ仰ぐのぬしもあかし

國中一圓十二万五千五百の人口ありて畠多くして田少なく四時の氣候も暖かなり民俗強中の強にして偏境の故何事にも第一を志す氣質なり尤も暗くなりて至りて

其風俗も一ふしありて其管轄も一圓なり隣國相模の足柄縣に屬す國產は布絶。八丈紬紙と綿。豆州は相模の南にあり相模洋とも遠州の洋よりつゞきて

浪高く。其海中へさし出る。岬ハ安房と相對し武
蔵の海の袋口にて。こゝにも燈明
臺ありて渡海の船の便と
まて。西よりハ小足柄山大山
津久井丹澤山北山より

流出る。水ハ酒匂と甲州
より。流れて来る馬入といふ。
二つの川ハ海へ出づ馬入の
東の三郡ハ隣國神奈
川縣支配にて七里が濱や
江の嶋や。名勝多き指を折

中なり鎌倉山を控へていにし
へハ源朝臣頼朝の創業あ
りまいし古覇の跡昔ゆかし
處なり。又横須賀に
港なる造船寮を建置て
蒸気軍艦商船を新に

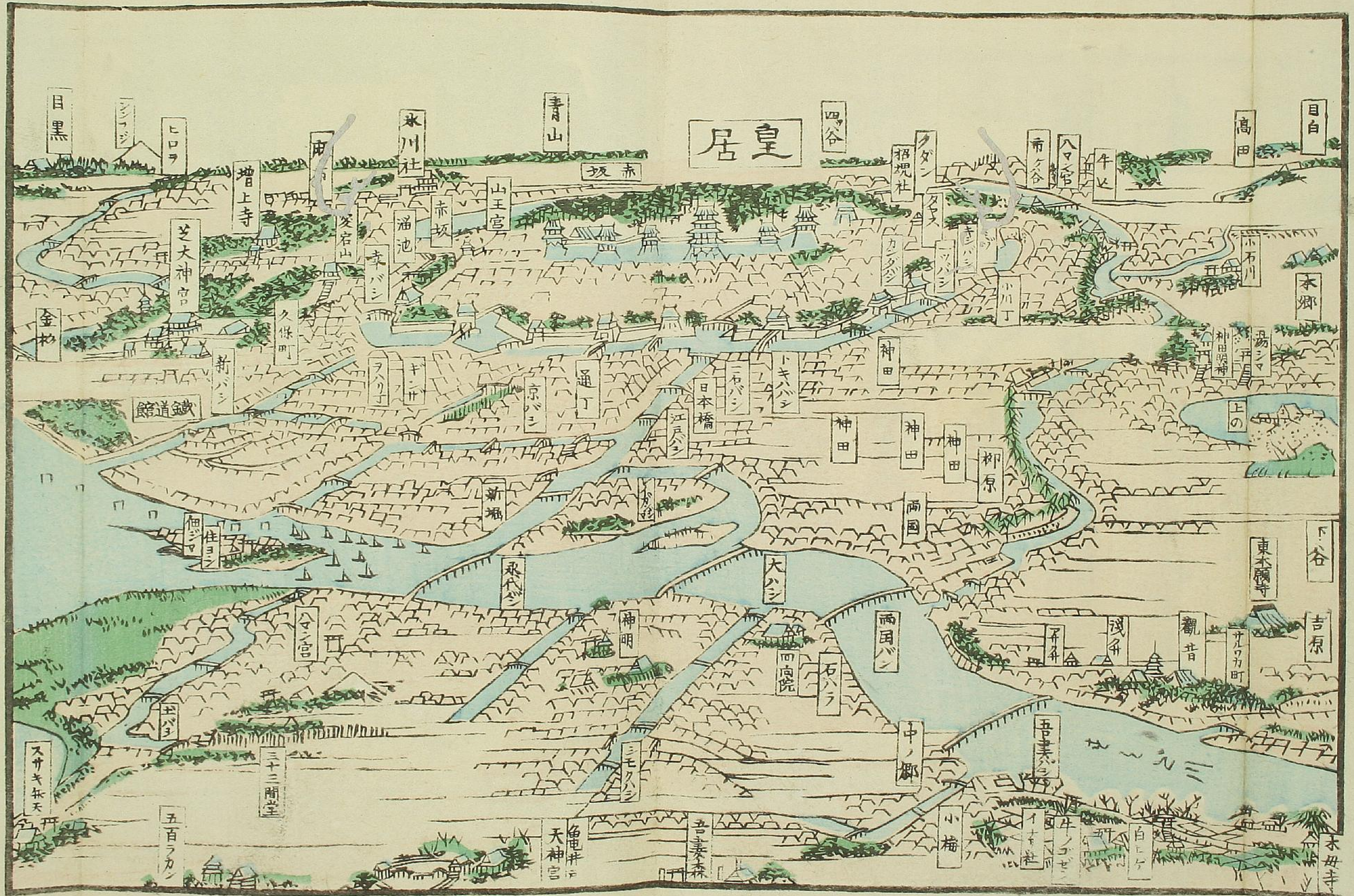
造り立て玉ふ西の箱根
ハ山上にて伊豆と相模との
國界なり。芦の湖ハ天嶮の
上下八里なる大峠にて頂上の
湖水まて冨士の高根ハ
影うつり眺望更に無双の景色も

又其外七所の温泉あり。湯治の客の絶間なし　箱根の麓小田原ハ足柄縣の廳ありて馬入以西の六郡と。伊豆一國を管轄す。一國九郡の人口凡二十七万八千余。

山多く空氣和らくして。海多く氣候平かなれバ人氣も豆相に似たれども。世事ある一時に随て轉變し易き所あり。其産物ハ海雀．梅干．大根．鎌倉海老。

第十一は武蔵なる平原に
廣くなして空と一つに
草の原。草よりいでて末流
又草にいる月影は。詠しも
今は一鉢の黄金にこの涌
土一鉢あまり黄金の花を咲く。

東京之圖



目黒
ヒロヲ
増上寺
芝大神宮
金杉
氷川社
青山
赤坂
山王宮
愛宕山
溜池
皇居
四ッ谷
招魂社
市ヶ谷
牛込
高田
目白
小石川
本郷
湯シマ
上の
新バシ
鐵道館
京バシ
通丁
日本橋
江戸バシ
一石バシ
トキハバシ
神田
柳原
両国
新堀
佃ジマ
住ヨシ
永代バシ
大ハシ
八マン宮
神明
回向院
石ハラ
両国バシ
下谷
東本願寺
観音
吉原
中ノ郷
小梅
スサキ弁天
五百ラカン
三十三間堂
天神宮
吾妻森
白ヒゲ
木母寺

東京府とて四里四方。世に類なき大都會。其人口を百万余。數千の大廈棟なり似億万の商戸星のごとく。碧瓦白壁立ち并び。錐を立つべき土地もなし。其

町〻は繁栄なる人の往来の
肩に摩れ。馬車人力の音
絶えずで。連る袂は幕の
ごとく。揮ふ汗は雨を
なし。商売日に盛に
〻百貨並べ輻輳して殊に

戊辰年乃。王政一新なり来て
萬機の出づる所なる。官省
寮司吏よりも。甍を連ね
山巍〻常に中にたなびく
白雲なれ。九重まで立つ禁
城なそこり聳えたる以や

高く。天津日嗣はいつまで
えし。位しまふ宮所万里
の長城不夜の城。昇平極
楽世界とよそ。此都をや
いふなるん。まして近来か
國法。交易盛ふ相いなるまじ

万民人てし居を占くす其ふ
王化り治まとし抹其か大
学小学の設けし日ふ牧
知ぼく。学の道はたゞすえ
よく。男女の子供おしなべて
教をとう更なとそのしてあ。あのら

しめんの海まで手つくしまゝ
有りて統るのなるまゝ揃
学問の道をすゝめ人の智識を
開き世間の風俗を敦く
して。家富国昌え身を
起し一人前の人となる。

ためなりしあまねくすべて是非とも
に貴賤男女のわかちなく。
伊呂波の手本から童子もみな
土地/\の学校へ。身を入れ
足を運びまして服用しなる
また学ぶべし。夫れよりさきて描き

當國は。土地ひろくて前にもいふ
ごとく。其うちにして武蔵野
とく。曠原平野相續きて廿
二郡の大國なり。北と東ハ
上野と。下野下總に界し
て界を流るゝは世に

利根川の名も高く。三大河の
中の其一にして。坂東太郎と
字せり。水源は上野にて。
其餘の國より流れ來る。
甘樂川乃下流なり。次に
中川は次にて。葛西太郎

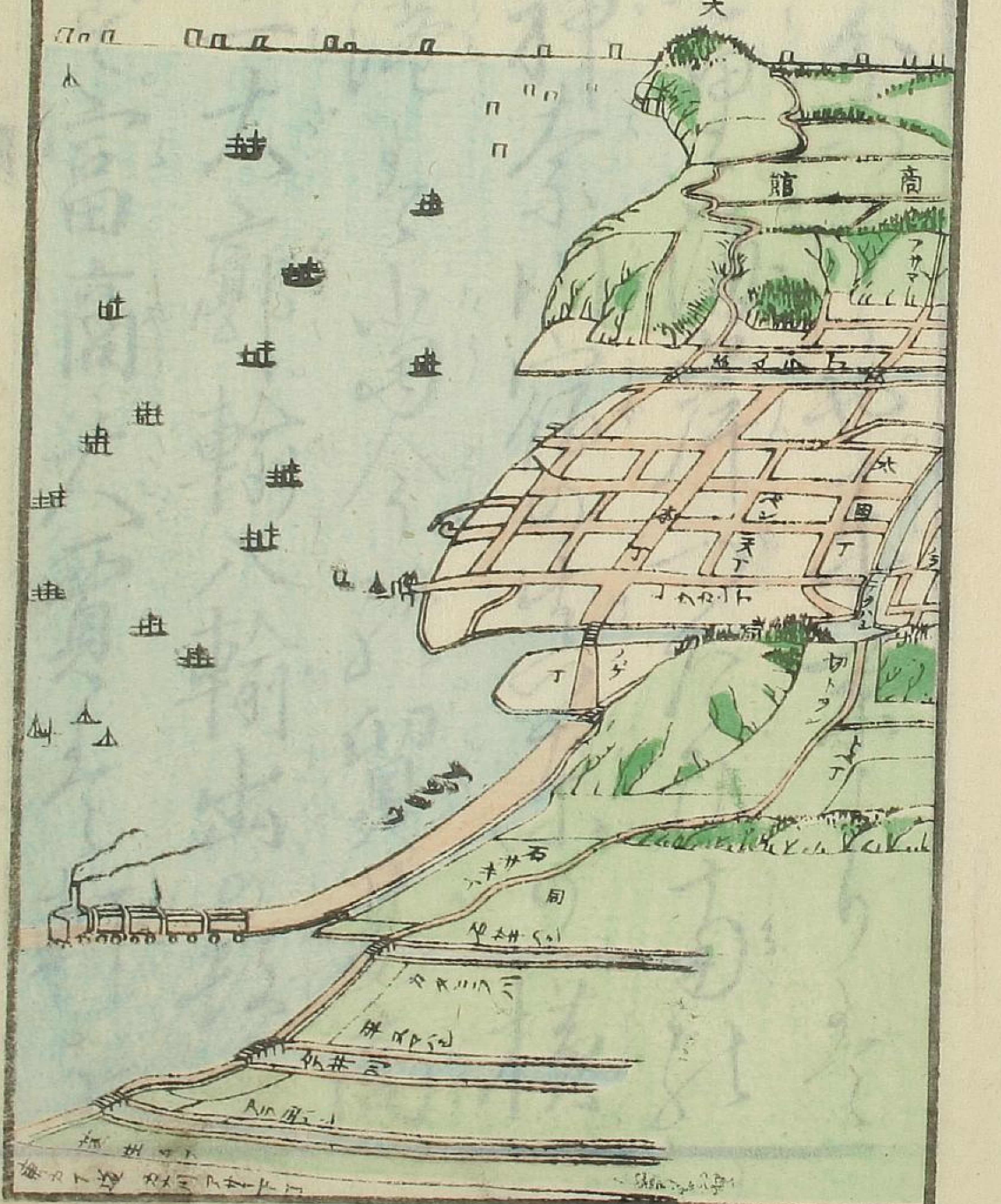
の角田川。其上流ハ秩父川。角田の川は當國の第一名類なき好奇景。富士と筑波ねを東西より隔て互より相照し。東風扶ゆく妻の日すし長堤一帯みな桜。

櫻は花か。まかふぬ雪ちらしくも三迺の堤のうへまて織なすよりうれしき遊ひの人往来。夏は納涼より秋かての月。川風寒き冬の日もしこゝ棹させて雪見船四季節に

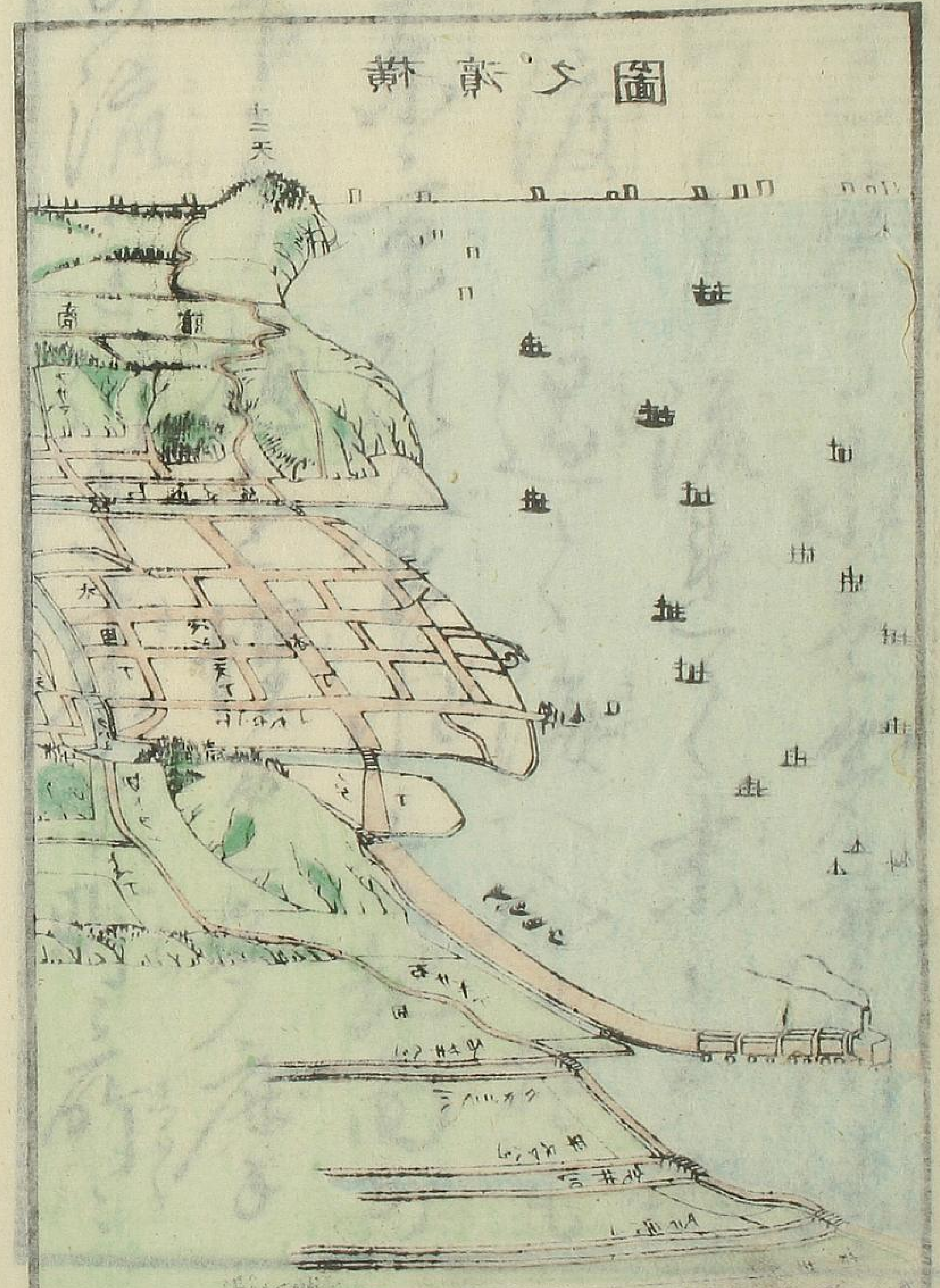
の眺望は筆にも記し
尽されず。南東より一面に
武蔵の海北は入海なく。日
本橋に大港大船小船数
千万蒸気帆前の西洋
形船も入りて其多く出て

けしく光景にて四海の潮
みなぎつて限りなきと
疑はる。西の方は甲斐信
濃つゞきて秩父の山々
嶽三峰武甲山南は小佛
高尾山甲斐の國より流

横濱之圖



まで來る。水にて多摩川清らかなり。流れて末は六郷の渡を過ぎて海へ入る。抑も東京の食水にて地面の下より樋を埋めて多摩の流れを引き来る町々所々



ありけるとかや。東京よりして
路七里。海岸づたひ西南
方神奈川宿のはづれの横
濱港まで。当今外國貿易商
社の一大廓。輸入輸出の数に
まして。富商大賈しも軒をさと

並ぶ畫樓繡閣天を冥く
亦是一箇の不朽の株に實す
仙境に在る心地せらる其より
更に南方乃濱をつたふて
金澤といふ又も得がたき風景
の眺望画にも寫し難しとて

昔巨勢の金岡が筆を
捨しも理ありとかや此の
管轄する一府二縣なりおよそ
まづ東京は東京府中の府廳に
ある荏原と豊嶋の二郡
夫より足立と葛飾の内

を分つて管轄し西の郡
は十三で入間郡の川越なり。
入間縣の廳あつまりく。今まで
之を支配せられ。其文字の埼
玉と改め。はじめ足立葛飾は。
埼玉郡岩槻なり。埼玉縣

廳の支配なり。南四郡と隣
はし。相模の國乃三郡の三
浦鎌倉高座と合せて
支配する廳をかの横濱
の神奈川縣。支配を名なる
まで武藏一國を總計し。

二十二郡にて人口は。一百六十
六万人。気候中正土地肥て。
田畠一体麦作なり。冬は
餘寒もきびしくて。春秋
ともに風多し。其風俗は
気広く。性質すなほにて活

達にして物に屈せぬやうなれ
ども都会の地なれば自ら
奢美より流れて柔弱に。
陥る風もあなれば慎
むべきの第一なり。其名物
の大概は。浅草海苔に久我

索麺岩槻木綿鹿子染。
紫染や錦絵髻結合
羽の烟草入。
貫十二と十三郡。安房と上
總の地を續き。南は安房
下小上總二つ合せて廣さ大

の海へさし出し岬より相
模武藏に對し其三方
は海を両國も東なる
なき太平海南は里も小
山多く嶮岨の處所なし
あらず其界目を鋸山花立

峠・清水山土地の氣候よく
武蔵地とこのもりしてとも
あまねきてらん人の氣質よく
偏屈なく。安房ハ人口十
三万上總の國ハ一國よて三
十六万四千余此あたりの管

轄なる上總の國ハ木更津
にして武蔵へ向ひ一湊。
土地ハ廣小都なし木更
津船を立置くのる安房
ハ浪の子木綿苔目
黒鯛や上總ハまた大多喜

鰯り鰒の類。二ゞ楽まりちあ
る産なれ。
第十四ハ下総（しもふさ）にて武蔵（むさし）
と上総（かづさ）に挿（さしはさ）まりし。武蔵（むさし）
の海ハ袋（ふくろ）の底（そこ）にて常陸（ひたち）に
地（ち）を隔（へだ）つる坂東太郎（ばんどうたらう）の其也

末（すゑ）ハ下野（しもつけ）常陸（ひたち）の山（やま）々よりあつまり。
流（なが）れて出（い）づる川（かは）と共（とも）に集（あつ）
まり堰（うねく）と界（さかひ）す。沼（ぬま）と海（うみ）よ
入（い）る所もも比（くら）べて一体（いつたい）に川（かは）
河（が）ハほく。沼（ぬま）おほく武蔵（むさし）は
つゞく処までも。又平原（へいげん）なも

おほしと號す。沼の北なる大な
るを印旛郡のいんば沼こゝの
邊に佐倉とて當國西部
の九郡をすべて管轄なせる縣
廳所なり。之を印旛の縣とい
ふ。殘る東北三郡は新治に

常陸は土浦の。新治縣に
支配あり。合せて國の人
口凡四十七万八千余。風土風
俗みなすべて上總の國に
異ならず。其産物は葡萄
海苔結城紬より三度栗。

十五常陸は一國にして。東海
道のはて十一國。西は山よ東
海。池沼川水充満し。西は
隣の下野より流るゝ川
那珂川や。北より来る久慈
川も。其名も高き筑波

嶺の峯より落る水名野
川。水石野に川水流れ来て
霞が浦の末遠くてのぞけ
き流れ。京へまで常陸の
一勝地。其傍の土浦の新治
郡の笠間を鹿島にし名之よ

又下総より河内二郡続く。
筑波に列る山ありて高さ
伊に伯仲して。北より金
砂高鈴山。磐城の界より
花園山にいたる五郡あり
那珂川北を流れて水戸の茨城

縣其縣廰の支配なり一國
中の人の数四十八万五千余。
其風俗すべて只管なり。胆太く
して我意を張らし。其産
物は蘘和田鯉。西の内紙
小杉原なり。

瓜生氏日本國盡巻二終

010190534184